

『源氏物語』 「鈴虫」 巻・女三の宮の御持経 ― 筆跡の教育効果から ―

岩 原 真 代

はじめに

「鈴虫」巻、女三の宮の持仏開眼供養において、光源氏は出家した女三の宮のために御持経（法華経）と阿弥陀経を自筆する。

経は、六道の衆生のために六部書かせたまひて、みづからの御持経は、院ぞ御手づから書かせたまひける。これをだにこの世の結縁にて、かたみに導きかはしたまふべき心を願文に作らせたまへり。さては阿弥陀経、唐の紙はもろくて、朝夕の御手ならしにもいかがとて、紙屋の人を召して、ことに仰せ言賜ひて心ことにきよらに漉かせたまへるに、この春のころほひより、御心とどめて急ぎ書かせたまへるかひありて、端を見たまふ人々、目も輝きまどひたまふ。野かけたたる金の筋よりも、墨つきの上に輝くさまなども、いとなむめづらかなりける。軸、表紙、箱のさまなどいへばさらなりかし。これはことに沈の華足の机に据ゑて、仏の御同じ帳台の上に飾られたまへり。

(④三七四頁)

源氏の手による御持経と阿弥陀経は、持仏と同列に飾りつけられ、その秀麗さは参列客の目を驚かせて持仏開眼供養を荘厳した。また、「宿木」巻では源氏直筆の琴の賦も女三の宮に伝来していたことが語

られる。² その後の女三の宮の住環境と仏道修行の環境は、光源氏の色彩に染め上げられており、朱雀院由来の品々は三条宮に移されている。³ 『源氏物語』において人物が誦経・読経する場面は多いが、写経する場面は当該場面のみである。『栄花物語』では、追善供養のために写経する一条天皇、藤原道長、小一条院の理想的な姿が点描され、また、皇太后宮嬪子方の女房三十人が『法華経』の書写を行ったとある。『法華経』を書写供養した者は「かならず切利天」(②二四〇頁)に転生する、とあり、藤原道長も「滅罪生善のため」(②一九九頁)、しきりに写経を行っている。光源氏の写経は、女三の宮との縁を結びなおす執心の営みであった。⁴ 自筆の御持経は女三の宮の仏道修行を支え、道心の成長を源氏が導くものである。

物語において光源氏の筆跡が際立つのは、手紙類のほか、須磨の絵日記と「梅枝」巻の明石姫君入内の調度として製作された仮名手本である。絵画と手跡に彩られた芸術性の高い須磨の絵日記は、絵合の勝利をもたらした文化人の蛸宮によって、「筆とる道と碁打つこととぞ、あやしう魂のほど見ゆるを」(②三八九頁)と芸道論の中に位置づけられ、源氏の天賦の才が称揚されている。仮名手本も同じく蛸宮によって鑑賞され、「見たまふ人の涙さへ水茎に流れそふ心地して、飽く世あるまじきに」(③四二〇頁)と鑑賞者の目を釘付けにしている。源

氏自筆の作品の芸術性の高さは、見る者の心を虜にし、感化するものである。それでは、「鈴虫」巻において、時間をかけ「御心とどめて急ぎ書き」製作された源氏自筆の経文は、享受者である女三の宮にどのような影響を及ぼすのか。

文字には神仏や人を動かす力があり、筆跡も人物の精神世界を表し、またそれを学ぶ者の精神世界を形作るものである。『古今著聞集』には、三筆三蹟等の能書家の逸話があり、「もろもろの芸能の中に、手跡まことにすぐれたり。」(上巻三四五頁)と文化・教養の筆頭に位置付けられ、筆跡を介した神仏との交信も記されている。『大鏡』でも、藤原佐理が三島明神の神託により扁額を奉納した故事が語られる(九八―一〇〇頁)。寺社の扁額を書くことは能書家にとって名誉なことであり、『江談抄』には、その執筆をめぐって佐理が生霊になり、藤原行成に崇ったという故事まである。また、『大鏡』では、村上天皇中宮藤原安子が藤原兼通に与えた「関白をば、次第のままにせさせたまへ。ゆめゆめ違へさせたまふな」(二〇七頁)という自筆の遺言書が円融院の母への孝養心をとらえ、兼通の関白内大臣就任が決定した、とある。

子女教育においても筆跡は重要視された。『枕草子』「清涼殿の丑寅の隅の」の段では、藤原師尹による娘芳子への后がね教育として、「…また姫君と聞えけるとき、父おとどの教へきこえたまひけることは、『一つには御手を習ひたまへ。次には琴の御琴を、人よりにことに弾きまさらむとおぼせ。さては古今の歌二十巻をみなり浮かべさせたまふを御学問にはせさせたまへ』となむ聞えたまひけると、聞しめしおきて、…」(五四頁)

とあり、書道の習得が第一、続いて琴の琴と『古今和歌集』の暗唱が必須教養とされた。『大鏡』には藤原行成や藤原佐理が能書家として紹介され、佐理の娘も「女手書」(一〇二頁)として活躍している。『更級日記』では、藤原行成女も、その美しい手紙が菅原孝標女の手習の手本にされたことが記されている(二九七頁)。ここには書道の才の系譜と継承、そして子女の能力に対する周囲の期待が見られる。また、『つづほ物語』のあて宮の後宮や『大鏡』の藤原頼通の養女姫子の後宮には、能筆家や歌人などの「よき女房」(四二八頁)が「はなやかに」集められていた。後宮の文化環境の担い手として、能書の女性が重宝されていたことが分かる。

それでは物語において筆跡はどのような意味を持つのか。『源氏物語』の筆跡に関しては、「梅枝」巻の筆跡評を中心として多くの研究が重ねられてきた。筆跡には作中人物の人物の人物の人物が現れ、人間関係も書き分けられている。本稿では、筆跡の教育効果に着目して、物語における手跡の意義を問い、出家後の女三の宮をめぐる再教育の環境を考える。

一、子女教育と筆跡

筆跡による教育効果は、紫の上養育の例に顕著である。

A (紫) かこつべきゆゑを知らねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらん
と、いと若けれど、生い先見えてふくよかに書いたまへり。故

尼君のにぞ似たりける。いまめかしき手本習はば、いとよう書

いたまひてむと見たまふ。雖など、わざと屋ども作りつつけて、もろとも遊びつつ、こよなきもの思ひの紛らはしなり。

〔若紫〕①二五九頁

B (紫の上) 風吹けばまづぞみだるる色かはる浅茅が露にかかると
さがに

とのみあり。(源氏)「御手はいとをかしうのみなりまさるものかな」と独りごちて、うつくしとほほ笑みたまふ。常に書きかはしたまへば、わが御手にいとよく似て、いますこしなまめかしう女しきところ書き添へたまへり。何ごとにつけても、けしうはあらず生ほし立てたりかと思ほす。(賢木)②一一八頁

紫の上の成長が筆跡に確認されている。A、当初、故北山の尼君に似ていた紫の上の筆跡は、B、光源氏の薫育のもと、与えられた手本や手紙に感化され、源氏の筆跡の型を吸収し、ただ似るだけでなく、女性らしさをも合わせ持つ理想的なものへと進化、発展している。源氏の芸術性の高い筆跡には、紫の上の才能を開花させる教育の成果が見て取れる。そして紫の上の健やかな成長は、源氏の道心を妨げる一因となる。やがて「梅枝」巻の筆跡評では、当代の仮名の名手として朧月夜と朝顔と紫の上が挙げられている(③四一六頁)。

一方、末摘花の筆跡は、見るに堪えないものであった。

晴れぬ夜の月まつ里をおもひやれおなじ心にながめせずとも

口々に責められて、紫の紙の年経にければ灰おくれ古めいたるに、手はさすがに文字強う、中さだの筋にて、上下ひとしく書いたまへり。見るかひなうち置きたまふ。いかに思ふらんと、

思ひやるもやすからず。かかることを悔しなどはいふにやあらむ、さりとしていかかはせむ、我はさりとも心長く見はててむと思しなす御心を知らねば、かしこにはいみじうぞ嘆いたまひける。
〔末摘花〕①二八七頁

末摘花の筆跡は前時代の古風な書風であるが、これは故常陸宮の古風な教育の影響であろう。¹² 光源氏の上の品の女への盲目の憧憬は末摘花によって打ち砕かれていく。また、近江の君も悪筆の女君であるが、筆跡は作中人物の養育環境と生育した文化圏の性質を如実に語るものとなっている。末摘花の経験に懲りた源氏は、玉鬘引き取りの際には、まず手紙の返歌と筆跡からその性情と才知のほどを査定し、六条院入りの合格点を出している。¹⁴ 筆跡は人物の成長の履歴と所属する文化圏の質を語るものである。

筆跡により密事が暴かれる契機となる例もある。¹⁵ 光源氏と朧月夜の密会は右大臣によって発見されたが、現場に落ちていた畳紙の筆跡は、紛れもなく男が源氏であることを証明するものであった(賢木)②一四五―一四六頁)。「若菜下」巻の柏木と女三の宮の密通の露見も、手紙と筆跡を介したものである。

大殿は、この文のなほあやしく思さるれば、人見ぬ方にて、うち返しつつ見たまふ。さぶらふ人々の中に、かの中納言の手に似たる手して書きたるかとも思しよれど、言葉づかひきらきらと紛ふべくもあらぬことどもあり。年を経て思ひわたりけることの、たまさかに本意かなひて、心やすからぬ筋を書き尽くしたる言葉、いと見どころありてあはれなれど、いとかくさやかに書くべしや、あたり、人の、文をこそ思ひやりなく書

きけれ、落ち散ることもこそと思ひしかば、昔、かやうにこまかなるべきをりふしにも、言そぎつつこそ書き紛らはししか、人の深き用意は難きわざなりけり、とかの人の心をさへ見おとしまひつ。

〔若菜下〕④二五三頁

光源氏は柏木の筆跡を何度も確認し、他人が似せて書いたものかとも疑うが、手紙の内容も当事者でなければ書けぬ類のものであった。極秘の文でありながら筆跡を紛らわそうともしない柏木の不用意さに、源氏は見下げた思いがする。このように、筆跡には秘事露見の物証という、物語展開を促進する機能があり、また、他者にその用心を計られることにもなる。

筆跡に教養とそれまでの生育環境が垣間見られるのに対し、天賦の才を感受される例もある。次は、薫の手紙の例である。

…見たまへと思しう假名がちに書いて、端に、

〔薫〕竹河のはしうち出でしひとふしに深き心のそこは知りきや

と書きたり。寝殿に持て参りて、これかれ見たまふ。(玉鬘)「手なども、いとをかしうもあるかな。いかなる人、今よりかくととのひたらむ。幼くて院にも後れたてまつり、母宮のしどけなう生ほしたてたまへれど、なほ人にはまさるべきにこそはあめれ」とて、尚侍の君は、この君たちの手などあしきことを辱めたまふ。

〔竹河〕⑤七四頁

玉鬘は薫の能筆を認め、悪筆の子供達を責める。先に玉鬘は、薫の和琴の音色に故致仕大臣の音色を聞き取っており、薫の出生の秘事の影響が匂わされる。しかし、薫の筆跡は故父源氏や母女三の宮の影

響ではなく、自得したものであり、薫固有の性情を特徴づけるものとなっている。

二、女三の宮の筆跡と文化環境

それでは女三の宮の場合は如何であろうか。女三の宮の筆跡には当人さながらの幼稚な性情が現れていた。次は女三の宮からの後朝の文である。

紅の薄様にあざやかにおし包まれたるを、胸つぶれて、御手のいと若きを、しばし見せたてまつらであらばや、隔つとはなけれど、あはあはしきやうならんは、人のほどかたじけなし、と思すに、ひき隠したまはむも心おきたまふべければ、かたそば広げたまへるを、後目に見おこせて添ひ臥したまへり。

〔女三の宮〕はかなくてうはの空にぞ消えぬべき風にただよふ

春のあは雪

御手、げにいと若く幼げなり。さばかりのほどになりぬる人はいとかくはおはせぬものと目とまれど、見ぬやうに紛らはしてやみたまひぬ。他人の上ならば、さこそあれなどは、忍びて聞こえたまふべけれど、いとほしくて、ただ、(源氏)「心やすくを思ひなしたまへ」とのみ聞こえたまふ。

〔若菜上〕④七二七三頁

紅の薄様という、見るからに恋文然とした様式に、年齢にそぐわぬ「若く」幼稚な筆跡で返歌がしたためられている。女三の宮の養育は朱雀院の影響下にあったが、万事において行き届いていない。続い

て、結婚後初めて昼に女三の宮を訪問した場面でも、光源氏は「いとらうたげに幼きさま」をした女三の宮の様に、朱雀院の「おいらかな教育の結果を見るにつけ、紫の上を見事に育て上げた自らの教育の優位性を確信する（④七三〜七四頁）。

女三の宮の筆跡に現われる幼稚な性情は、父朱雀院も危惧している。降嫁後、朱雀院は紫の上に女三の宮の後見を依頼する手紙を送り、その返信を受け取る。

御返りはいかがなど、聞こえにくく思したれど、ことごとしくおもしろかるべきをりのことならねば、ただ心を述べて、

（紫の上）背く世のうしろめたくはさがりがたきほだしをしひてかけな離れそ

などやうにぞあめりし。女の装束に細長添へてかづけたまふ。御手などのいとめでたきを、院御覧じて、何ごともいと恥づかしげなめるあたりに、いはけなくて見えたまふらむこといと心苦しう思したり。（「若菜上」④七六頁）

正妻の座を追われた紫の上の返信には、女三の宮を降嫁させた朱雀院への非難が率直につづられていた。紫の上は和歌の内容に加えて、朱雀院に文化教養面での優位性を見せつけるべく、秀逸な筆跡で文をしたためている。その筆跡を見るにつけ、朱雀院は女三の宮の幼稚さがしのばれている。

女三の宮の降嫁に際し、朱雀院は「六条の大殿の、式部卿の親王のむすめ生ほしたてけむやうに」（「若菜上」④二七頁）と、光源氏が若紫を育て上げたように、女三の宮の場合もその親代わりとなって保護、養育してくれることを期待していた¹⁶。しかし、源氏は六条院降嫁

後も、女三の宮周辺の生活・文化環境を変えることなく、過ごさせている。次は夕霧視点での女三の宮の様子である。

大将の君は、この姫宮の御事を思ひ及ばぬにしもあらざりしかば、目に近くおはしますをいとただにもおぼえず、おほかたの御かしづきにつけて、こなたにはさりぬべきをりに参り馴れ、おのづから御けはひありさまも見聞きたまふに、いと若くおぼきたまへる一筋にて、上の儀式はいかめしく、世の例にしつばかりもてかしづきたてまつりたまへれど、をさをさげざやかにもの深くは見えず、女房なども、おとなおとなしきは少なく、若やかなる容貌人のひたぶるにうちはなやぎさればめるはいと多く、数知らぬまで集ひさぶらひつつ、もの思ひなげなる御あたりとはいひながら、何ごともどやかに心しづめたるは、心の中のあらはにしも見えぬわざなれば、身に人知れぬ思ひ添ひたらむも、また、まことに心地ゆきげにとどこほりなかるべきにしうちまじれば、かたへの人にひかれつつ、同じけはひもてなしになだらかなるを、ただ明け暮れは、いはけたる遊び戯れに心いれたる童べのありさまなど、院はいと目につかず見たまふこともあれど、ひとつさまに世の中を思ひのたまはぬ御本性なれば、かかる方をもまかせて、さこそはあらまほしからめと御覧じゆるしつ、いましめととのへさせたまはず。正身の御ありさまばかりをば、いとよく教へきこえたまふにすこしもつつけたまへり。（「若菜上」④一三三〜一三四頁）

女三の宮の生活環境は降嫁前のものを維持している。女房たちと遊び戯れるばかりの環境であり、光源氏の関与はわずかである。降嫁

皇女はその身分が保証され、生活環境も婚家の家風には影響されにくいのである。源氏が宮に教育したのは、朱雀院が「さりとて琴ばかりは弾きとりたまひつらん」(「若菜下」④一八一頁)と期待した琴の琴のみである。

しかし、柏木との密通事件や薫の出産を経て、朱雀院の手で落飾した後、女三の宮周辺の環境整備は源氏が担うこととなった。出家後の女三の宮の筆跡は、父朱雀院への返歌に見られる。

御返りつつましげに書きたまひて、御使には青鈍の綾一襲賜ふ。書きかへたまへりける紙の御几帳の側よりほの見ゆるをとりに見たまへば、御手はいとはかなげにて、

(女三の宮 うき世にはあらぬところのゆかしくてそむく山路に思ひこそ入れ

「うしろめたげなる御気色なるに、このあらぬ所もとめたまへる、いとうたて心憂し」と聞こえたまふ。(「横笛」④三四八頁) 女三の宮の筆跡は「いとほかなげ」とある。これは、柏木に対して送った文と同じ表現である。¹⁷ 出家は果たしたものの、いまだ出家者としての自覚も自信も持ち得ていない、内面の稚拙さがありのままに筆跡と和歌に現われており、源氏は返歌を受け取る朱雀院の心境を付度する。出家による精神の発展は手紙の内容と筆跡には見られない。そして、出家後も六条院に住み続けることになる女三の宮の環境と光源氏の庇護の様子は、父朱雀院との文通によって推量せられ監視され続けるのである。

「鈴虫」巻、持仏開眼供養に際し、源氏は手ずから準備を行う。冒頭の場面において、源氏は女三の宮の御持経と阿弥陀経を製作する。

『源氏物語』では誦経、読経の記事は多く見られるが、写経の記事はこのみである。『今昔物語集』には、聖徳太子自筆の法華義疏を書写すると、太子が夢に顕現した、という故事がある。¹⁸ 肉筆の経文は、源氏の存在を否応なく享受者に感受させるものであった。『新編日本古典文学全集』頭注はこの写経の意義を「年若い宮への憐みと、また断ちがたい執着の深さを表しているようである」(④三七五頁)と解する。しかし、光源氏が経文類を自筆したことには、女三の宮の再教育の意味もあつたのではないか。光源氏の自作の作品は、須磨の絵日記、「梅枝」巻の仮名手本、そして「宿木」巻に見られる琴の賦である。¹⁹ 絵日記の一部は藤壺に献上され、残りは仮名手本と共に明石の姫君に継承される予定である。両者は源氏の心そのままに創作されたものであつた。一方、女三の宮に与えられた御持経は、日々の仏道修行において読経され写経されて、人物の精神世界を形作るものである。源氏は自らの筆跡を女三の宮に書写させることで、精神面での成長と道心の深化を願つてもいる。また琴の譜は、女三の宮の趣味の部分であるが、ここでも肉筆を通して源氏の存在が感じられ、影響が及ぶようにしくまれている。女三の宮の精神状態は手紙によって父朱雀院に伝えられる。光源氏は女三の宮に自筆の品を与えることで、再教育を試みるのである。同時に、光源氏は出家した女三の宮に対しては多くのモノを与えることでしか愛情表現できず、関係性を結べないのである。しかし、その後の女三の宮は、芸術品である源氏の創作物にあまり影響されていない。かつて光源氏の筆跡に学んだ若紫は感化され、その才能を開花させた。教育効果を持つ芸術品は、それを受容する女君の感受性如何によって効果を発揮する。学ばぬ女三の宮の造型と、紫の

上の学習能力と感性の優越性がここでも明白になる。

出家以前、源氏は女三の宮に対して「人目の飾りばかり」(④一三五頁)の待遇をし、生活環境も整えずに過ごしていた。教育としては、琴の琴を朱雀院の意向に沿って教導したが、感性を磨き、情愛を深める効果はあっても、内面の改善にまでは及んでいなかった。出家後においては、精神世界を形作る法華経や阿弥陀経、遊びの分野である琴の賦を通して、その内面世界にまで介入し、源氏の管理下に置こうとしていると考えられる。源氏は女三の宮のために写経することによって、導師となる位置に自らを据え置いている。

持仏開眼供養の後、女三の宮が持経に接する姿は次のように描かれている。

① 十五夜の夕暮に、仏の御前に宮おはして、端近うながめたまひつつ念誦したまふ。(「鈴虫」④三八一頁)

② 宮は、仏の御前にて経をぞ読みたまひける。何ばかり深く思しとれる御道心にもあらざりしかど、この世に恨めしく御心乱るることもおはせず、のどやかなるままに紛れなく行ひたまひて、一つ方に思ひ離れたまへるもいとうらやましく、かくあきへたまへる女の御心ざしにだにおくれぬることと口惜しう思さる。(「幻」④五三二頁)

③ 宮の御前に参りたまへれば、いと何心もなく、若やかなるさましたまひて、経読みたまふを、恥ぢらひてもて隠したまへり。何かは、知りにけりとも知られたてまつらんなど、心に籠めてよろづに思ひあたまへり。(「橋姫」⑤一六五～一六六頁)

①②は六条院における女三の宮の仏道修行の様子であるが、迷い

なく仏道に向かつてはいるものの、格別に仏道に入魂、没頭しているわけではない。女三の宮は出家当時から光源氏の支配を離れることのみを求めていた。③は源氏の没後、三条宮に移住してからの修行生活のさまであるが、六条院を離れることは女三の宮の心に叶ったものがある。出生の秘事を知った薫の目からも、女三の宮の昔に変わらぬ様が語られる。源氏自筆の経文は女三の宮をその無意識下においても支配し、内面を再教育しようとするものであるが、受容する側の感受性の低さや「何心な」い取り組み方では、源氏の薫育も一向に活かされず、効果のほどは見られない。女三の宮は源氏が創出した六条院文化の担い手となることは無いのである。ここでも紫の上との大きな差異が示される。

おわりにかえて

女三の宮の出家後の生活環境が光源氏の自作自演の物品にあふれ、女三の宮は管理される対象である一方、紫の上は、自ら仏教的空間を作り出す。「御法」巻の法華経千部供養では、法華経をはじめ仏事の準備は紫の上の肝いりで用意されている。ここでは源氏の手を離れたところで一人道心を温め、深めていた紫の上の真情が現れている。

紫の上の筆跡が最後に現れるのは、その死後の「幻」巻である。光源氏は亡き紫の上の文を保管していた。

死出の山越えにし人をしたふとて跡を見つつもなほまどふかな
(④五四七頁)

源氏は紫の上の筆跡に心惑わされてしまう。それゆえ、源氏は文

般に和歌をしたためて共に燃やすことにする。

かきつめて見るもかひなし藻塩草おなじ雲居の煙とをなれ

(④五四八頁)

ここでは、源氏が「千年の形見」(④五四七頁)にもなりそうな紫の上の文を焼却させている。光源氏の紫の上への愛執の断念や『竹取物語』の引用が説かれる場面であるが、ここでは紫の上との深い関係を、「燃やす」という行為によって断ち切り、彼女の極楽往生を祈るさまが見て取れる。源氏は出家しながらもその統制下、現世に生き続けざるをえない若々しいばかりの女三の宮には、自分との関係性を固く結びつける自筆の御持経と琴の譜を与え、現世を離れた紫の上には、源氏を惹きつけて止まなかった文般の供養によって、執心を断ち、菩提を弔う行為を行うのである。これによって紫の上の形見は無くなった。

これまで、紫の上の存在は源氏にとって現世の「絆」であった。紫の上の文も、彼女の存在の証である。そしてその消滅は、現世に繋ぎ止められていた存在の名残をも往生させる行為である。源氏は文への執着を断つたことで最後の「絆」を断ち切り、出家に向けた一步を踏み出すことになるのである。

【注】

¹ 『源氏物語』『うつほ物語』『枕草子』『更級日記』『大鏡』『栄花物語』の本文は、『新編日本古典文学全集』(小学館)による。

² 「宿木」巻の藤花宴には、光源氏自筆の琴の譜二巻が宝物として今上帝に献上されている。

南の庭の藤の花のもとに、殿上人の座はしたり。後涼殿の東に、楽所の人々召して、暮れゆくほどに、双調に吹きて。上の御遊びに、宮の御方より御琴ども、笛など出ださせたまへば、大臣をはじめたてまつりて、御前にとりつつまゐりたまふ。故六条院の御手づから書きたまひて、入道の宮に奉らせたまひし琴の譜二巻、五葉の枝につけたるを、大臣取りたまひて奏したまふ。次々に、箏の御琴、琵琶、和琴など、朱雀院の物どもなりけり。

(「宿木」⑤四八一頁)

薫への女二の宮降嫁の記念として献上されたのであるが、琴の譜を献上することによって、光源氏の筆跡の呪縛から逃れようとする女三の宮の意志もあるのではないか。

³ 拙稿「光源氏と女三の宮の住環境―六条院春の町改築の意義―」(『源氏物語の住環境―物語環境論の視界―』おうふう 二〇〇八年)

⁴ 『新編日本古典文学全集』④三七四頁、頭注。

⁵ 拙稿「求婚者たちと消息文―柏木の「あはれ」の希求と文字信仰―」(前掲注(3) 同書) 参照。

⁶ 『古今著聞集』の本文は『新潮日本古典集成』(新潮社)による。

⁷ 『江談抄』第三―三四「佐理の生靈行成を悩ます事」には、行成が佐理を差し置いて扁額を書いたため、その生靈に悩まされた、とある。

「前奥州云はく、「佐理卿、平生の時、行成卿、某所の額を書きて進るべき由、勅命を蒙る。先達の候ふ由を奏せられず、書きて進らんとする間、佐理の生靈来たりて、行成を悩ませり。数日に及びて痛だ悩めり」と云々。予、主殿頭公経に謁ひし次

に、この事を語る。公経答へて云はく、「佐理存生の間、按察

大納言、いまだかつて一度も額を書かれざりしか」と云々。

（『新日本古典文学大系』八五〇八六頁）

⁸ 『更級日記』において藤原行成女の筆跡は、形見として孝標女に鑑賞、回想されている。（「同じをり亡くなりたまひし侍従の大納言の御むすめの手を見つつ、すずろにあはれるに……」三〇一頁）。

⁹ あて宮の入内には、女房が四十人、才芸のある者が随った。「御供人、大人四十人、みな四位、宰相の娘、髪丈にあまり、丈よきほかに、手書き、歌詠み、琴、琴弾き、人のいらへすること、みな上手。」（「あて宮」②一一七頁）とある。『うつほ物語』では俊蔭の母皇女も「むかし名高かりける姫、手書き、歌詠みなりけり」（「蔵開中」②四七五頁）と紹介されている。

¹⁰ 『大鏡』には、「よき女房多く、伊賀少将・小弁・小侍徒などいひて、手書き・歌よみなど、はなやかにいみじうて、さぶらはせたまふ」（四二八頁）とある。

¹¹ 宮川葉子氏『源氏物語』における「手」——梅枝巻を中心として——（『青山語文』第一七号 一九八七年三月）、河添房江氏「梅枝」巻の光源氏」（『源氏物語の喩と王権』有精堂 一九九二年、初出は一九九一年）。

¹² 井田有哉氏『源氏物語』と書道」（『帝京国文学』第六号 一九九九年九月）。末摘花の筆跡は「御手の筋、ことに奥よりなり。」（「玉鬘」③一三七頁）、「御手は、昔だにありしを、いとわりなうしじかみ、彫り深う、強う、固う書きたまへり。」（「行幸」③三二五頁）とあるように、古風な書風であり、六条院文化圏にはなじまぬ、古

宮家の家風と性質を反映している。

¹³ 前掲注（12）井田氏論。近江の君が弘徽殿女御にあてた手紙の筆跡は「点がち」で、誰の書風にも似ておらず、正当な教育から外れている。

葦垣のま近きほどにはさぶらひながら、今まで影ふむばかりのしるしもはべらぬは、勿来の関をや据ゑさせたまへらむとなん。知らねども、武蔵野と言へばかしこけれども。あなかしこや、あなかしこや。

と点がちにて、裏には、「まことや、暮にも参りこむと思つたまへ立つは、厭ふにはゆるにや。いでや、いでや、あやしきはみなせ川にを」とて、また端にかくぞ、

「草わかみひたちの浦のいかが崎いかであひ見んだこの浦波

大川水の」と、青き色紙一重ねに、いと草がちに、怒れる手の、その筋とも見えず漂ひたる書きさまも、下長に、わりなくゆゑばめり。行のほど、端さまに筋かひて、倒れぬべく見ゆるを、うち笑みつつ見て、さすがにいと細く小さく巻き結びて、撫子の花につけたり。（『常夏』③二四八〜二四九頁）

¹⁴ 「玉鬘」巻において、光源氏は玉鬘の和歌を読み、手跡に気品を見出して安堵し、六条院入りを決定する。

数ならぬみくりやなにのすぢなればうきにしもかく根をとどめけむ

とのみほのかなり。手は、はかなだちて、よろぼはしけれど、あてはかにて口惜しからねば、御心おちぬにけり。

- 15 鈴木宏子氏は、「手紙が第三者の目に触れる、読むべき相手に読まれないといったアクシデントにより、物語が大きく展開する場合もある。」とする(「ふみ【文】『源氏物語事典』大和書房二〇〇二年)。
- 16 朱雀院は女三の宮の婿選びに際し、「見はやしたてまつり、かつはまた片生ひならんことをば見隠し教へきこえつべからむ人のうしろやすからむに、預けきこえばや」(「若菜上」④二七頁)とあるように、後見となる者に未熟な女三の宮の保護と教育を期待していた。
- 17 女三の宮は臨死の柏木に対して手紙を贈る。柏木の目には、「御手もなほいとほかなげに、をかしきほどに書いたまひて」(「柏木」④二九六頁)と、頼りないがきれいな筆跡と映る。
- 18 「天王寺、為八講於法隆寺写太子疏語第十一」(『新日本古典文学大系今昔物語集』③三〇九〜三一頁 岩波書店)
- 19 前掲注(2) 参照。
- 20 三村友希氏「紫の上からの〈手紙〉—文字と言葉と身体と—」(「物語研究」第二号 二〇〇二年三月)
- 21 『新編日本古典文学全集』④五四八頁、頭注。
- 22 物語中、文を燃やす場面は「浮舟」巻にもある(⑥一八五頁)。死を覚悟した浮舟は匂宮の手紙や手習を破棄し、決意を固めようとする。文の焼却はここでもこの世への執着を断つ行為としてある。また、弁の君の手にあつた女三の宮と柏木の文の束に関しては、焼却処分することを思案されたことが、薫に対して語られる(「橋姫」⑤一六一頁)。物語において手紙は存在証明の意味を持つ。

(③一二四〜一二五頁)